

# 泊船本『野ざらし紀行』の表記特性

濱 森太郎

〔要旨〕

「泊船本」の用字法は「画卷本」の啓蒙的な用字法を継承し、さらに整理・統合したものと云える。また、整理・統合された表記の単調さは、要所に極微量、装飾字母を配置することで極力カバーされている。このため、使用字母並びにその用法に「画卷本」と幾分食い違いが生じたが、この集中利用される仮名字母と微量の装飾字母とのバランスの中に、「泊船本」筆者並びに清書者の力量が折り込まれているのである。

## 一 はじめに

卷子本・画卷本・版本・写本と、体裁の異なる『野ざらし紀行』を『野ざらし紀行』という言葉で概括してきたこれまでの習慣は改

められなければならない。メディアとして見れば、卷子本の目的の半分は書美の追求にあり、画卷本の目的の大部分は美術品の創作にある。同じく、版本『野ざらし紀行』の目的の半分は商品の制作にあり、写本の目的の大方は自家用の保蔵にある。メディアとその目的の違いが生み出す表記・表現の相違に気付いたとき、『野ざらし紀行』はまったく別の顔を現出するからである。

別に述べたように「天理本」から「画卷本」への推敲過程には二十種の仮名字母の変更があった。しかも、この二十種の仮名字母の変更には、書き易く読み易い仮名字母を選び、その字母を繰り返して集中的に用いる用字意識が認められた。この仮名字母の変更によって、芭蕉は「天理本」に見られた複数の汎用字母（修辭上、格別制約なく汎用される字母）の併用状態を解消するとともに、汎用字母の性格を失った字母の用途を限定し、行頭・行末・語頭・語尾・品詞・活用形を表示する文字として特殊化したのである。<sup>1)</sup>

「天理本」から「画卷本」に至る推敲過程で生じた松尾芭蕉の表記意識の変化は、後々、芭蕉の文章表記を大きく規定する一つの意志によって貫かれている。すなわち、書体・字体を統一し、読み易く書き易いテキストを作りだそうとする啓蒙的な意志である。その意志の産物である画卷本『野ざらし紀行』（和田御雲氏蔵）の用字は、行頭・行末から品詞・活用に至るまで精細な秩序に満ちている。

だが、書体・字体を統一した啓蒙的な「画卷本」には意外な欠点もあった。書体・字体を統一した結果、筆跡に華麗さが消え、いわば「商品」的魅力に欠けるものとなったのである。では、芭蕉の啓蒙意志を生かしつつ、「商品」として成熟したテキストはどのように書かれるべきか。私は版本「泊船本」の表記を解析し、版本の筆者がこの課題にどのように答えたか、説き明かしてみたいと思う。

## 二 「画卷本」の表記の特徴

さて、この問題を具体的に論じるには、次に用意した「泊船本」・「画卷本」独自表記の数表に依るのが便利である。

この表は、「画卷本」「泊船本」の独自の表現・表記の中の、独自の漢字表記・仮名表記の数量を表示したもので、「画卷本」では独自の漢字表記四一例、独自の仮名表記一六例。この二つを合わせると五七例。この分量は、「画卷本」独自の表現・表記全体（一〇

表一「野ざらし紀行」独自表現の分布

		独自の漢字表記	独自の仮名表記	合計	独自の表現・表記全体
野ざらし紀行画卷	41例	16例	57例	108例 (53%)	
泊船本	16例	45例	61例	93例 (66%)	

八例)の五三%を占める。

一方、「泊船本」では、独自の漢字表記一六例、独自の仮名表記四五例。これを合わせれば六一例。この分量は「泊船本」独自の表現・表記全体(九三例)の六六%を占める。全体の数値に大差はないが、「泊船本」では独自の仮名表記が、独自の漢字表記を圧倒している。

では、何故、「泊船本」で独自の仮名表記が増加するのか。

「表一」のパーセンテージに明らかのように、漢字表記の適性水準をめぐって表記が変動する『野ざらし紀行』では、諸本の異同の約六〇%がそれに関係する。その中でも、「画卷本」独自の漢字表記は、『紀行』第一部(江戸から大垣まで)二十一例、『紀行』第二部(大垣から江戸まで)十六例で、この分量は、『紀行』第一部(一五〇六文字)、第二部(七五〇文字)の文字量を考慮すれば、『紀行』第二部にやや独自の漢字表記が多いと言える。

次に、その特徴の一つは、「哉」「計」「歎」

(か)、「共」(とも)などの助詞の漢字表記、また一つは「忽」(たちまち)、「必」(かならず)、「中」(なかなか)などの副詞の漢字表記である。また、一つは、

104 忘(れ) (泊「わすれ」)

124 昇り(登り) (泊「登り」)

130 忍(ぶ) (泊「しのぶ」)

163 時雨(しぐるゝ) (泊「しぐるゝ」)

187 盗(ま)れ (泊「ぬすまれ」)

216 喰(ら)はん (泊「くらはん」)

※( )内は筆者。「泊」は、「泊船本」を意味する。以下同じ。  
など、やや恣意的な動詞の漢字表記や、

161 木枯(らし) (泊「凧」)

169 朝(あした) (泊「旦」)

など、やや大まかな名詞の漢字表記に見出される。助詞・副詞の漢字表記は、少し漢風、また動詞・名詞の漢字表記はやや私意的な文字使いと言えようか。

ちなみに、「画卷本」独自の仮名表記は、総数で一六例。第一九例(一五〇六字)、第二部七例(七五〇字)。したがって、分布上は、『紀行』の第二部にやや集中すると言って良いだろう。この仮名表記の特徴の一つは、

42 おひす (泊「不帯」)

84 日ころ (〃「日比」)

132 やまと (〃「大和」)

103 この (泊「此」)

120 これ (〃「是」)

のような誤読を誘発しがちな訓漢字を避けたかと疑われる仮名書きである。こうした読み易さを考慮した仮名表記が「画卷本」第二部に集まるのは、「画卷本」が巻を追って恣意的な漢字表記を減じ、独自の仮名・送り仮名を増すためと思われる。

### 三 「泊船本」の漢字・仮名表記の特徴

一方、「泊船本」独自の漢字・仮名表記には、読み易さを配慮したとみられる表記がもっと頻繁に見出される(表二・三)。

表二「泊船本」独自の表現・表記(漢字表記)

No.	画卷本	泊船本
1	無何に	無何
6	却て	却而
23	ほとり	辺
28	うき世	浮世
45	けり	見

210	197	168	161	156	119	102	55
生	(	朝	時雨	木枯	昇り	ふかく	かけ
	)		よか				
活	懸て	且	しくるゝ歟	凧	登り	深く	懸

※通し番号は巻末付表一(A)の通し番号による。  
 ※同じく漢字表記でも文字が違っている場合は、送り仮名を添えて読む場合の参考になるので掲載した。  
 1・119・156・168・210。以下同じ。

「泊船本」独自の漢字表記を集めた「表二」の総数は、九例(参考五例を除く)。これは、「泊船本」独自の表現・表記全体(九三例)の一〇%にあたる。先に出げた「画卷本」では、同じ例が四一例あることから言つて、この分量は格段に少なく、かつ第一部に遍在する。

また、次の「表三」は「泊船本」独自の仮名表記を集めたもので、総数で四五例。これは、「泊船本」独自の表現・表記全体(九三例)の三八%にあたる。「画卷本」では、同じ例一六例(一四%だったのに比べれば、「泊船本」の仮名表記の増加量は大きいと言つてよい。

表三「泊船本」独自の表現・表記(仮名表記)

140	139	138	133	128	109	108	107	87	75	71	56	51	35	34	32	26	19	17	3	No.
くれ	あき	旅ね	また	あり	あと	いをり	われ	れい	たきもの	いひ	あり	ちや	かぜ	あき	きく	あり	ある	つくし	さむ気	泊船本
暮	秋	旅寝	又	有	跡	庵	我	彼	たき物	云	有	茶	風	秋	聞	有	有	尽し	寒気	画卷本

※通し番号は、巻末付表一Aの通し番号による。

248	245	244	241	236	235	233	221	218	214	211	185	184	164	159
なつ衣	かへり	いほり	たちより	くたらん	あづま	かたみ	ことし	われ	きよ	さくら	あふ	すかた	ゆき見	草まくら
夏衣	帰り	庵	立より	下らん	東	形見	今年	予	聞	桜	逢	姿	雪見	草枕

加えて、この仮名表記の具体的な特徴はいつそう興味深い。たとえば、「泊船本」の

- 19 ある (画卷本「有」)  
 26 あり (〃〃「有」)  
 56 あり (〃〃「有」)  
 128 あり (〃〃「有」)

という活用語の書き分けは、単に「有」と書いた場合に起こりがちな読みの混乱を予防する効果がある。同様に、

- 32 きく (画卷本「聞」)  
 214 きく (〃〃「聞」)

も、「聞」と書いた場合の読みの混乱を予防するものである。

そう考えれば、次のような活用語の仮名書きの注意深さもなるほどと頷けるだろう。

- 17 つくし (画卷本「尽し」)  
 71 いひ (〃〃「云」)  
 185 あふ (〃〃「逢」)  
 236 くだらん (〃〃「下らん」)

また、次の七例は、訓漢字表記の修正で、誤って音読されることを恐れたものか。

- 3 さむ気 (画卷本「寒気」)  
 138 旅ね (〃〃「旅寝」)

- 159 草まくら (〃〃「草枕」)  
 164 ゆき見 (〃〃「雪見」)  
 221 ことし (〃〃「今年」)  
 233 かたみ (〃〃「形見」)  
 235 あつま (〃〃「東」※他本「吾妻」)  
 248 なつ衣 (〃〃「夏衣」)

加えて、次の五例も同じである。

- 16 哀け (画卷「哀気」)  
 37 根ぎは (〃〃「根際」)  
 158 凧 (〃〃「木枯」)  
 160 しぐるゝ (〃〃「時雨」)  
 216 む月 (〃〃「睦月」)

いずれも訓漢字二字で書かれた和語が、誤って音読されることを恐れ、漢字の一方(または両方)を仮名書きに改めたものと推測される。

以上、要するに、「画卷本」の後半部に生じた啓蒙的な仮名表記、すなわち二字に渡る訓漢字を避けたかと思られる仮名書き、誤読を誘発しやすい訓漢字を避けたかと疑われる仮名書きが、この「泊船本」で一層広範に見出される。加えて、「泊船本」に顕著な仮名を用いた活用形の書き分けもまた、読み易い表記を意図した啓蒙的な努力と言って良いだろう。中には少し行き過ぎの例もあるが、

それもまた読み易さを配慮した芭蕉の工夫の一つである。

#### 四 「泊船本」独自の漢字表記の意図

もとより、不特定多数の読者用に企画された版本の表記が、啓蒙的な表記態度を示すのは当然の帰結でもある。だが、この啓蒙的な表記態度が「泊船本」の表記の総てを支配する訳ではない。先にも指摘したように「泊船本」には啓蒙的とはいいい難い表記が、特に第一部に遍在するからである。

すなわち、啓蒙を心懸ける「泊船本」第一部には、次のような表記が目立つのである。

- 1 三更月下無何入といひけむ (画卷本「無何に」)
- 6 秋十とせ却而江戸を指ス故郷 (〃〃「却て」)
- 28 浮世の波をしのくにたえず (〃〃「うき世」)
- 45 道のへの木槿ハ馬にくはれ鳥 (〃〃「けり」)

こうした漢字表記の意図を尋ねるに当たって重要なことは、これがいずれも、主人公の「述懐」に用いられることである。殊に1は、広聞和尚の頌偈の引用部、6は賈島の詩句の引用部であって、主人公の述懐が漢詩文の再生であることを匂わすものである。また28は、「浮」「波」の縁語関係を暗示し、「憂世」との混同を避けるため、45は句末の押さえを目的に用いられた装飾的な文字使用と思われる。とすれば、これらの漢字表記の意図はかなり繊細だと

見る必要があるだろう。

既に「画卷本」では、「述懐」の表記に主人公の感情や氣息を表象する配慮がある。桑名の海辺の曙の光景、唐崎の松を讀えた湖水の眺望、いずれも発句は、波間を漂う詠嘆を模して切れ切れに書かれている。また、吉野から大和に至る軽快な「出山」の光景、甲斐山中の勇み立つ「遊山」の光景も、軽快な足取りを刻むごとく小刻みのリズムで書かれている。「述懐」の表記・言葉・口調がその人物の身分・性格・氣分を表象することは、「匂」付、「響」付の例を引くまでもなく蕉風連句の常道である。その常道に倣えば、「泊船本」の先の堅苦しい「述懐」の口調が、そのまま主人公の書斎派らしい性格・氣息を表象すべく採用されたとしてもおかしくはない。改めて言うが、『野ざらし紀行』の大意は、漢詩文の造詣深い老俳諧師が「吉野行脚」の末にこの国の麗しい自然や生活に開眼し、「旅の醍醐味」満喫する次第を描くことにある。このため、主人公が発する堅苦しい漢文口調は『紀行』第一部に集中し、第二部では自然に消滅する。今、試みに『紀行』第二部の、独自の漢字表記を示すと、次のようになる。

- 102 深く (ふかく 画卷)
- 119 登り (昇り 画卷)
- 156 凧 (木枯 画卷)
- 161 しくるゝ欺 (時雨ゝか画卷)

168 旦 (朝) 画卷)

197 懸て (( ) 画卷)

210 活 (生) 画卷)

これらの表記が漢詩文の引用に関わらないことは言うまでもない。

これらの漢字表記の内、次の三例は、より正確な表意を目指した  
ものか。

119 「昇↓登」(山をのぼり)

168 「朝↓旦」(雪のあした)

210 「生↓活」(命二ツ中にいきたる桜哉)

119の「のぼり」は、坂道の登りを意味し、168の「あした」は「ヨナカ」「アカツキ」「アシタ」の「旦」であり、昼の時間区分の最初にある「朝」とは性質を異にする。また、210の「いきたる」は、散り乱れる桜の活況を言わんとしたものと思われる。さらに、

102 「ふかく↓深く」

は、「山深く」「峯に重り」「谷を埋んで」と続く述部の表記を揃え、半ば雲に閉ざされた深山幽谷の光景を強調したものの。

161 「時雨↘か↘しくる↘敷」

は、読み易さに加えて、句切れに強調符を打つ漢字の採用である。

「泊船本」独自の漢字表記が読み易さを追求しつつも、同時に表現の平板を避けるべく細やかに配置されたことが窺えよう。

## 五 「泊船本」仮名字母の啓蒙性

「書くこと」がそのまま「描くこと」に通じた表現の伝統を思い出す必要があるだろう。その伝統の中では、「山川」と書いた文字表象を通じて山紫水明のニュアンスを伝えることが可能だった。その伝統は、書体・字体・運筆に苦心する能書家の感受性の領域で開拓され、書芸の形で庶民の手元に伝授された。

逆に、日常用いられる記録類にも、それらしい表記の徴表があった。たとえば、自家の保蔵のために書写された孤屋本『野ざらし紀行』(彦根、専宗寺蔵)には、表現・表記に関わる細心の注意が欠けていた。多量に散在する助詞の誤字・誤脱、筆者の書き癖を反映した仮名遣い、自由な訓漢字の使用、音読速記を思わせる漢字の誤字は、「孤屋本」の筆者が本文を一度頭で意識した後、文字化したことを窺わせる。また、二つの字母を併用する十種の仮名、左右のバランスを重んじた筆者の用字性向、「阿」「加」以下六種の字母の修辭的な用法も、作者芭蕉の用字法とは異質のものである。しかも、第三稿と見なされるこの「孤屋本」系統に属するテキストは、この一本を除いて他に伝存の形跡がない。森川計六の私的な保蔵用文書を、所有者の吟味・賞翫に応えるべく執筆された正規の伝本と混同し、序列化したところに無理があったのである。<sup>(3)</sup>

さて、「泊船本」の啓蒙的な表記をさらに検討するため、「天理



表六 「泊船本」に登場する送り仮名

No.	汎用字母	送り仮名
1	い	大イニ
2	か	誰カ
3	け	分ケ
4	す	分ケ 2 (発句2)
5	つ	飄吟ス
6	と	詣ツ
7	に	千リ
8	り	既ニ
9	ん	取リ 3 (語尾3)
		埋ンテ 1

※「以31」の31は、用例数。

※送り仮名は、分かり易さを考慮して実例を一例あげた。

※「分ケ 2」は送り仮名「ケ」2例の意。

この「表四・五・六」の用字習性を備えた筆者の人物名は不明だが、「泊船本」で増加した先の六種の字母(表四)の中には、芭蕉の用字特性をしめす「遣」「本」の文字はない。また、「泊船本」では、装飾字母の採用(表五)につれて「画卷本」風の系統立つた用字法が一部で崩れている。

さらに、「画卷本」には欠けている送り仮名の多さも、「泊船本」の表記の特徴の一つである(表六)。カタカナを用いた活用語尾の追加が、初心者を読み易さを考慮した啓蒙的な文字使用であること

は言うまでもあるまい。

## 六 二〇の汎用字母

ところで、仮名表記の啓蒙性が先ず使用字母数の整理・統合形で現われることは既に述べた。そこでこの字母の集中度を比較するため、各本ごとに使用字母の総数に占める集中字母(一仮名を表記する複数の字母の内の一つが八五%以上を占める時、その仮名字母を仮りに集中字母と呼ぶ)の比率(合理化率)を計ると、次のようになる。

表七 『野ざらし紀行』字母の合理化率

	天理本	画卷本	泊船本
① 総字母数	1717 字	1338 字	1524 字
② 異り字母数	98 字	89 字	100 字
③ 集中字母総数	547 字	744 字	971 字
④ ①一③ %	31.9 %	55.6 %	63.7 %

※集中字母総数とは、集中字母(一仮名を表記する際に八五%以上を占める仮名字母)の総数。八五%の根拠は、一字母毎に集中度を観察すると、この八五%ラインを越える仮名字母

と越えない仮名字母との間に比較的大きな落差があるからである。

ここには、「天理本」「画卷本」「泊船本」と推敲が進むに連れて、字母の集中利用（合理化）が進む様子が現われている。また中で最も合理化されたテキストが「泊船本」（版本）であることは当然であろう。彫工の手間、仕上げ精度の保持、文字の読み易さから、版本の表記の合理化は避けられない。この表記の合理化に付随して筆跡の平板さが現われるが、筆跡の平板さは、要所に極微量、装飾字母を配置することでカバーされている。先上げた〔表五〕「阿」「希」「氣」「勢」等、用例小形で、しかも字形の華やかな文字二五字が、その装飾字母に当る。また、「泊船本」の字母の整理・統合と平行して「異なり字母数」が若干増えるのも、このためである。

次に、もう一つ、「画卷本」には、十四の汎用字母の他に、推敲過程で新たに集中が進んだ二〇の字母があった。そして、その二〇の字母には、字母が一種に統合された仮名（☆印）と単に主要字母が交替した仮名（無印）とがあった。今、その二〇種の仮名字母を「泊船本」と比較して表示すると、次のようになる。

表八 「画卷本」の特徴となる仮名字母

No.	仮名	画卷本	泊船本
☆1	あ	安	安
☆2	き	幾・支	支・幾
☆3	け	遣・希・介	介・遣・計
☆4	す	寸・春	春・寸
☆5	せ	世	世
☆6	た	多	多
☆7	て	天	天
☆8	と	止・登	止・登
☆9	な	奈	奈
☆10	に	尔・仁・耳	尔・耳・仁
☆11	ね	年	年・称
☆12	ひ	比	比
☆13	ふ	不・婦	不・婦
☆14	ほ	本・保	保・本
☆15	む	武・無・舞	武・無・舞
☆16	り	利	利
☆17	る	留	留
☆18	れ	礼・連	礼・連
☆19	を	无	无
☆20	ん	无	无

※☆印は、一字母が集中して用いられる仮名  
 ※○印は、字母が併用される仮名

この「表八」に依れば、「画巻本」で用いられた集中字母(☆印)十三種の内、十一種が「泊船本」で踏襲されている。また、残る(2)「き」・(11)「ね」の内、「ね」年・柀は用例が各一例に過ぎず、「泊船本」で字母が交替したとは判じ難い。このため、「泊船本」の個性と認められる仮名は、(2)「き」支・幾に限られる。つまり、両者の用字特性は明らかに類似しているのである。ちなみに、この「き」支・幾は、当時、一般通用の字母自体が併用状態にある仮名である。

次に、「画巻本」で字母が交替した七種の仮名(芭蕉自身でも用字に規則性の希薄な仮名。無印)の内、三種の字母の用法が「泊船本」で踏襲されている。残る四種の仮名字母は「泊船本」で再び字母が交替するが、その内(3)「け」介・遣・(4)「す」春・寸・(10)「に」尔・耳・仁・(14)「ほ」保・本は、一般通用の字母自体がやはり複数併用の状態にある。(中では「け」介)「ほ」保が一般通用の簡便な字母に交替したもの、「す」春「に」耳が装飾的な文字使用と言えるだろう。

また、「泊船本」独自の仮名字母の中には、一般通用の簡便な仮名字母を集中的に用いる意図を一層徹底した例もある。

- (1) 「そ」(楚)が消え、「曾」だけになる)
- (2) 「の」(能)が減り、「乃」に集中する)
- (3) 「は」(盤)が減り、「者」が増える)

(4) 「を」(越)が消え、「遠」だけになる)

ちなみに、芭蕉の書き癖が疑われる「遣」「本」が「泊船本」で「介」「保」に変更されていることは既に述べたが、この二つの字母も当時、複数字母が併用されていた仮名である。つまり、「泊船本」筆者の個性とみられる用字習性は、いずれも当時一般の筆者の用字習慣に含まれるのである。これは恐らく「泊船本」が、あくまで版行を想定して執筆された徴表であらう。

表九 推敲に伴う仮名字母集中利用の原因

No.	仮名	画巻本の用字法	泊船本の用字法
1	き	支1 (装飾1)	支23 (語尾19)
2	け	遣18 (汎用)	遣5 (装飾5)
3	す	春5 (装飾5)	春24 (汎用)
☆5	た	堂3 (装飾・語頭3)	堂3 (装飾・語頭3)
☆6	て	帝2 (装飾2)	帝1 (装飾1)
☆7	と	登13 (装飾・語頭13)	登1 (装飾1)
☆8	な	那1 (装飾・句末1)	那7 (装飾・句末7)
☆9	に	仁30 (語尾30)	仁16 (助詞に14)
☆10	ふ	耳19 (助詞に19)	耳47 (助詞に42)
☆11	ほ	婦5 (装飾5)	婦7 (装飾7)
☆12	む	本10 (汎用)	保10 (汎用)・本1
☆13	る	流2 (装飾2)	流2 (装飾2)
		舞4 (装飾・語尾4)	舞3 (装飾・語尾3)

※表内の数字は、用例数

※☆印は、同じ用字法が見られる例  
※無印は、主流となる字母が交替した例

## 七 おわりに

最後に、さらに詳細に先の二〇の仮名字母の用字法を「泊船本」のそれと比較すると、先の表九の通りである。(二〇字の内、用字法は上特徴に乏しい「あ」「せ」「ね」「ひ」「れ」「を」「ん」の七例は当然用字法が一致するので除外し、残る十三種の表を作成した。)

このように「画卷本」筆者の個性が強く表出される用字法を比較しても、「画卷本」「泊船本」は(5)「堂」・(6)「帝」以下二〇種中一五種、約七五%(☆印)の用字法に一致が見られるのである。

この一致は、たとえば「孤屋本」筆者の用字特性を「画卷本」と比較した場合の一致点がほぼゼロであることに比べれば、「画卷」「泊船」両書の親密さを窺わせると言ってもよい。

ちなみに、こうした簡便な字母の一部採用や装飾字母の追加が、「濁子清書画卷」のような「清書本」にも共通して見られるのは、それが清書者の裁量に任されていたためと思われる。また、この「濁子清書画卷」の表記の修正部が「泊船本」と一致しないところから、両書の間には直接の結び付きは考えがたい。「画卷本」を手放す前後に芭蕉の手許に残された一本(表記の一部を除けば、『濁子清書画卷』に近接した本文だったと推測される)が、さらに修正を経て、「泊船本」の原本になったものと思われる。

以上、要するに「泊船本」で増加する仮名書きの理由は、読み易さを意図して「画卷本」の恣意的な漢字表記を修正したもの、また一部は、表記をもって述べ懐する主人公の氣息を表象したものと考えられる。加えて、「泊船本」の用字法は「画卷本」の啓蒙的な用字法を継承し、さらに整理統合したものである。その整理・統合は、主として世間通用の簡便な字母を用いて行われたが、一方で、統合された表記の単調さを補うべく、要所に極微量、装飾字母を配置することも工夫された。このため、使用字母並びにその用法に、「画卷本」と幾分食い違いが生じたが、この集中的な汎用字母と微量の装飾字母とのバランスの中に、「泊船本」の筆者並びに清書者の力量が折り込まれているのである。

もとより「泊船本」の表現・表記の特徴はこれに尽きるものではない。「泊船本」の啓蒙的な表記の奥には、当然、啓蒙的な語彙選択・穏便な文脈の整理・簡明な結構の構築へと続く、広範な読者のための表現の調整が予想されるからである。いわゆる表現の推敲がメディアの性格や読者の理解力と不可分であることを明記して、次の機会を待ちたいと思う。

注

- (1) 拙稿「文字の修辭学—『野ざらし紀行画卷』推敲の側面—」(『三重大学日本語学』4号)参照。
- (2) 『野ざらし紀行』天理本・泊船本・孤屋本・画巻本・濁子清書画卷を校合し、独自の表現・表記を抽出した表を基に、画卷本・泊船本の該当項目の用例数のみを示したもの。なお、当面の主題たる泊船本については、巻末に付表Aとして表自体を掲げた。
- (3) 孤屋本『野ざらし紀行』の表記特性(『俳文芸』四二号、平成五年十二月刊)
- (4) この清書者は恐らく「泊船本」が収められた『泊船集』の編者風国かと推測されるが、確証はない。
- (5) 拙稿「文字の修辭学—『野ざらし紀行画卷』推敲の側面—」(『三重大学日本語学』4号)に指摘した。
- (6) 『改訂 野ざらし紀行・鹿島詣』(弥吉管一氏他、明玄書房刊) 35頁では、「泊船本」は第二稿とされているが、私は定稿と考えている。
- (7) 拙稿「文字の修辭学—『野ざらし紀行画卷』推敲の側面—」(『三重大学日本語学』4号)参照。
- (8) 一般通用の仮名字母について、「川柳の仮名—国語字体史の視点から—前田富祺」(『日本語・日本文化研究論集』4号)、

木越治「近世文学作品における字母の用法について—『ますらを物語』『おくの細道』『教訓私儘育』の場合—」(『国語文字史の研究』一)前田富祺編、九二・九月 和泉書院刊)によった。

(9) 当時の一般通用の仮名字母の判断は、(8)による。

(10) 伊藤厚貴「濁子清書画卷」の清書意識」(『三重大学日本語学』4号)参照。

本稿を成すに当たり、米谷巖先生よりご校閲の労を賜わった。記して心から感謝の意を表したい。

付表(A) 泊船本『野ざらし紀行』独自の表現・表記

No.	天理本	画巻本	孤屋本	泊船本
1	無何に	無何に	無何に	無何
3	寒氣	寒氣	寒氣	さむ氣
6	却て	却て	却て	却而
7	さす	指	指	指す
10	たり	たり	たり	けり
13	ちり	ちり	ちり	チリ
14	ちりと	ちりと	ちりと	チリト
17	尽し	尽し	尽し	つくし
19	有	有	有	ある
21	預	預	預	影ケ
22	ちり	ちり	ちり	チリ
23	ほとり	ほとり	ほとり	辺
26	有	有	有	あり

113	109	108	107	103	102	97	94	88	87	82	75	72	71	70	60	56	55	52	51	45	43	40	35	34	32	28
みえ	跡	庵	我	伐	ふかく	大イサ	当麻寺に	彼	彼	まゆ	たぎ物	女	云	てふ	入事	有	かけ	まつはや	茶	けり	折ン	にくむ	風	秋	聴	うき世
みえ	跡	庵	我	伐	ふかく	大イサ	当麻寺に	彼	彼	まゆ	たぎ物	をんな	云	てふ	入事	有	かけ	松葉屋	茶	けり	おらん	悪	風	秋	聞	うき世
見へ	跡	庵	我	伐	ふかく	大イサ	当麻寺に	例の	例	まゆ	焼物	女	云	てふ	入事	有	掛	松葉屋	茶	けり	おらん	悪む	風	秋	聞	うき世
見え	あと	いをり	われ	伐ル	深く	大いさ	当麻寺	れいの	れい	肩	たきもの	おんな	いひ	てう	入	あり	懸	松葉や	ちや	鼻	折ん	悪ム	かぜ	あき	きく	浮世

182	180	177	176	168	166	164	161	159	157	156	154	153	148	147	143	141	140	139	138	133	131	128	127	123	120	119
きのふ	水とり	むこ	たか	あした	うらふ	雪み	しくるゝか	くさ枕	竹斎に	こからし	入	やとり	詣つ	あつた			暮	秋	たひ寝	又	所	有	いたる	年	既	のほり
昨日ふ	水とり	聲	誰か	朝	うらふ	雪見	時雨ゝか	草枕	竹斎に	木枯	入	やとり	詣	熟田	かたに	枕	暮	秋	旅寝	又	所	有	至る	年	既	昇り
きのふ	水取	婿	誰	あした	うらふ	雪見	しくるゝか	草枕	竹斎に	木からし	入	やとり	詣	熟田	方に	枕	暮	秋	旅寝	又	所	有	いたる	年	すてに	のほり
昨日	水取り	婿	誰か	且	うらう	ゆき見	しくるゝか	草まくら	竹斎ニ	風	入ル	屋とり	詣ツ	熟田	かたへ	まくら	くれ	あき	旅ね	また	処	あり	いたるに	年を	既ニ	登り

248	247	246	245	244	241	237	236	235	233	222	221	218	215	214	211	210	209	206	201	200	198	197	189	185	184	
夏衣	程に	婦りて	婦り	庵	立よる	わけ出る	下ン	吾妻	形見	むつき	我	きたり	したひ	桜	いき	ふたつの								やまち	逢	姿
夏衣	ほとに	婦りて	婦り	庵	立より	分出る	下らん	東	形見	陸月	今年	予	来り	聞	桜	生	二ツの							山路	逢	姿
夏衣	ほとに	婦りて	婦り	庵	立より	分出る	下らん	東	形見	むつき	今年	我	来り	聞	桜	いき	二ツの	雀かな	千鱈サク	其かけに	躑躅	かけて	山路	逢	姿	
なつ衣	かへり	かへり	いほり	たちより	分け出る	くたらん	あづま	かたみ	む月	ことし	われ	来たり	きょ	さくら	活	二ツ	雀哉	千鱈さく	其陰に	つよし	懸て	やま路	あふ	すかた		